平成30年（2018）
阿づまの光
4月号・Aprilo

大本東京本部
開設50周年

題字出口直日
通巻第589号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 猪子 恒
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

教主さまお作 灰釉茶盌 銘「櫻」

【みろく池土　筆留櫻釉】

一身一如

祭務課　神宮　幸太郎

お陰さまで、東京本部に着任してから2年が経ちました。関東教区の皆さまのお顔やお名前も大分覚えることができ、日々接する中、大変お世話になっております。感謝の一言です。

さて、来る4月29日は四代教主さまが天津御国に昇られ、17年になります。小生、四代さまのご晩年に、当時の内事室朝陽館に勤務していました。22～23歳の頃で、約20年も前のことです。普段はSさん、Nさんと3人でご奉仕をしていましたが、内事室総出のときもありました。四代さまが、ご親教などの時に、全員で玄関や門の前に並んで「お見送り」「お出迎え」をすることです。時間前には、玄関のお庭やその周辺を徹底的にお手入れし、気持ちよくお渡り（お帰り）いただけるように、内事室員で協力しながら準備をしました。四代さまは我々の姿が見えなくなるまで、ずっと手を振ってくださったことが懐かしく思い出されます。

四代さまは、時には厳しく、また優しく接してくださいましたが、ある時の「お見送り」では、厳しいご注意がありました。

「格好ばっかりのお辞儀ならしてもらわんでもよいで」と。

内事室員に仰ったお言葉は、形ばかりにこだわりすぎて、肝心の『心』が伴っていないことを、ご指摘なさったのです。以後、このお言葉は私の心にいつもあり、奉仕生活の元になりました。他から、「できているのか？」と問われれば冷や汗しか出ませんが、その後、部署を異動しても一番気を付けていることです。現在、祭務課勤務で、祭典の準備に裏方にと、務めさせていただいていますが、四代さまにご指導いただいたことを忘れず、現教主さまのもと、精いっぱいお仕えさせていただければと、百錬成鋼の気持ちでご奉仕に臨みたいと思います。

今月の聖言

くもりなきまでに身魂をみがかむと
朝な夕なに神業いそしむ

出口王仁三郎聖師

日本人の誇りと使命

古来、わが国の民族精神は、やまと魂（大和魂・日本魂）と称えられていました。大本でいう日本魂は民族精神であるのと同時に、宇宙の根元神から賦与（ふ）された至純至誠の生粋の大精神をさして使われます。出口王仁三郎聖師が説く日本人の使命とはなにかをお伝えします。

『いづのめしんゆ』に学ぶ

大本には二大教典として、出口なお開祖に国祖・国常立尊さまが神懸りをなされて記されたお筆先『大本神諭』と、出口王仁三郎聖師が神示のままに口述・筆記して残された『霊界物語』がございます。

さらに、開祖が昇天した大正7年後に、国常立尊さまが王仁三郎聖師に神懸りされて記された『いづのめしんゆ』（伊都能売神諭）という教典があり、平成28年9月に、大本開教120年記念事業の一環として刊行されました。

『いづのめしんゆ』には、日本の国体や日本人としてのあり方など、さまざまなことが示されています。例えばこのように記されています。

「今の世界の人民の精神を改造いたしておいて、世界の改造に掛かる経綸（しぐみ）であるから、日本の人民は一日も早く神の洪恩（こうおん）を弁（わきま）え、皇室の尊厳と国家の大使命と国民の天職を覚って、誠の日本魂（やまとだましい）に立ち帰り、一番にこの神国を修斎し、次に国民一致の神力でがいこくを平らけく安らけく治めてやらねばならぬのが、日本人民の神から与えられた大使命であるなれど…」（大正8年3月7日〔旧暦2月6日〕）

日本には他に真似のできない教えと特別な使命があって、日本人はその素晴らしい国に生を受けていることを早く自覚してほしい、と繰り返し述べています。また「皇室の尊厳」とか「万世一系」など、皇室や天皇についても随所に触れています。

昭和天皇の尊厳とマッカーサー

そこで、私はあらためて皇室や天皇というものを調べてみました。

今上天皇は125代、皇紀でいうと2677年。これは世界的にも最長で、日本は歴史と伝統ある最古の国家として正式に認められ、ギネスブックにも認定されています。

先代の昭和天皇は、植物や動物など自然をこよなく愛されましたが、終戦直後、マッカーサーとのこんなエピソードが残されています。

昭和20年9月27日、昭和天皇はマッカーサーのもとを訪れます。マッカーサーはてっきり、昭和天皇が命ごいに来るものと思って、出迎えもせず、自室の椅子に深く座って足を組んで煙草をふかしながら待っていたそうです。そのマッカーサーに対して、昭和天皇は直立不動のまま、戦争に関する一切の責任は自分にあり、いかなる極刑に処されても構わないが、罪なき8000万の国民に衣食住のご高配を賜りたい、とおっしゃったのです。

自分の命と引き換えに国民を助けてほしいという昭和天皇の言葉に、マッカーサーは大いに驚き、椅子から立ち上がって、今度はまるで一臣下のように直立不動の姿勢をされ、最後は予定を変更して、自ら玄関まで見送ったということです。この時の感動を、マッカーサーは「天皇は日本における最高の紳士である」と評しています。

昭和天皇の後を継がれた今上天皇は、国民に向き合うことを大切にされてきました。皆さまもご記憶に新しいと思いますが、東日本大震災ではご夫妻でたびた

～21世紀・生きがい講座～

出口 眞人（大道場講師・社会福祉法人愛善信光会理事長）

び被災地へ足を運ばれ、膝をついてお見舞いをされ、多くの感動を呼びました。おそらく国民の前に膝をつかれた天皇は今上天皇が初めてではないでしょうか。

また、国内外の戦跡の慰問など、枚挙にいとまがないほど、並大抵のお働きではありません。

このような皇室のあり方は、日本人の精神の根底に流れている「清明正直」、清く、明るく、正しく、直くという心持ちであり、神道の精神世界でもあります。この精神こそ、日本の皇室の品格、質素で純粋、精神的美しさに表れているのではないかと思えてなりません。

三代教主の天皇へのお気持ち

「敬神尊皇愛国」

これは、さる9月23日に大本の出口直日三代教主が亡くなられて27年目の年祭が行われたときに、お茶席に掲げられたお軸です。三代教主が19歳の時に書かれたものです。

三代教主の天皇に対するお気持ちは『寸葉集』という著書の中に記されています。

「宮中の観桜宴にご招待いただきました時、わたしはそのことを心からうれしくおもいました。それは明治の日本に生まれ、ながい間、皇室尊重の気持ちを培われてきたわたしの素直な気持ちでありました」

また、その時の昭和天皇へのお気持ちを和歌にも残しています。

右に左に桜かがよふ朝の道
大君のへに吾は急ぎぬ

たをたをと皇后陛下あゆみたまふ
慈歩といふはこのことならむ

み頬少しやつれいまして白髪まじる
御髪も親しわがすめらみことは

大本はかつて天皇の名において大きな弾圧を受けました。その苦しみは決して忘れるものではありませんが、三代教主ご自身は、既にこの時、そうしたものを超越したお気持ちをお持ちであられたことがわかります。

また、日本の国についても、次のようなお示しがあります。

「わたしはどこに、今日のくるいが来たかを聞かれれば、日本という国のよさ、有難さ、日本人のながい伝統によって培った人間の生き方を、そまつにしてしまったところにあるとおもうのです。いまの日本の母親から『もったいない』『ありがたい』という言葉が、あまり使われないところに、子どものもっている霊性とか因縁をのばしてやれない要因があるとおもいます」

私は亀岡保育園の理事長として子供たちと一緒に生活しています。三代教主が示された素朴な日本というものを少しでも子供のうちから体験させてやりたいと願い、お抹茶のお運びや作陶、能楽鑑賞など、さまざまな機会を作るようにしています。

『日本魂をもって建つる国』

王仁三郎聖師は、教典『道の栞』の中で、

「日本は神の御心を心として動くべき国なり。日本は日本魂をもって建つる国なり。日本魂とは平和、文明、自由、独立、人権を破る者に向かって飽くまでも戦う精神をいうなり。無理非道なる強き悪魔を倒して、弱き者の権利を守る精神なり。いやしくも貪欲と野心のために、人の国や他人の権利を犯し損わんとするものは、みな日本魂の敵なり」

と記しています。

今の時代に日本魂と言うと誤解される向きもあるかもしれませんが、いわゆる政治的・思想的なことではなく、人間の本質として魂の声、魂の叫びとして日本魂という精神が、今の時代にこそ必要ではないでしょうか。地上天国・みろくの世の建設という大使命のもと、日本人一人ひとりが何らかの形で神さまのご用に役立たせていただかねばならないと思えてなりません。

掲載文は、平成29年11月15日に航空会館（港区新橋）で開催した「21世紀・生きがい講座」講演録の要旨です。

東光苑月次祭・春季合同慰霊祭

東光苑月次祭・交通安全祈願祭・春季合同慰霊祭は、3月11日、午前10時30分から、斎主・高野春樹祭務課長のもと執行され、306人が参拝した。

祭員は茨城主会、少年祭員は同主会の渡邊真仁君、伶人は二絃の会関東支部、大本神諭拝読は中島浩山梨主会長、添釜は宇野社中が担当した。

春季合同慰霊祭では、東日本大震災からちょうど7年を迎える日となることから、震災で犠牲となられた神霊も招魂し、み慰めのみ祭りを執行した。

祭典後、東京本部を代表して猪子恒東京宣教センター長があいさつ。第165回大本青年信徒研修会・高校生講座の参加おすすめを兼ね、50年前に北海道から35時間をかけ参加した思い出を紹介。引き続いて殿内に高校生講座のPRビデオを上映した後、東京主会・渡辺咲さん（20歳代）、東京主会・日下文世さん（30歳代）、本部職員・柿崎哲男さん（40歳代）、茨城主会・椿リツさん（50歳代）が、それぞれ各世代の代表として高校生講座に参加した思い出を語った。最後に現役世代からのメッセージとして、神奈川主会・森澄子さん（高校2年生）が、高校生講座の魅力を語り、参拝者に聖地への青年の送り出しを呼びかけた。

高校生講座の魅力を語る、森澄子さん

また午後2時から、関東教区青松会主催による研修会が開催され、始めに青松会員による、ぼたえもん童話「八兵衛と六助」の紙人形劇。続いて大本総代・嶋貫光喜福島主会長が、震災7年を迎えての現在の心境を語った。ついで、吾郷孝志国際愛善宣教課長が「みたままつりの大切さ」と題して講話した。

教本認定講習会

「教本講師・講師補認定講習会」が2月23～25日の三日間、また「教本各級認定講習会」が2月24・25日の両日、ともに大本東京宣教センターを会場に開催され、講師補認定クラス1人、1・2級認定クラス13人、3級認定クラス14人の、合わせて28人が受講した。

講師補認定講習会は、本部講師のもと、レジュメの作成や講話実習を中心に講習。また各級認定講習会は、本部講師に加え、茨城主会・飯田俊明教本講師、神奈川主会・南寛教本講師も加わり開かれた。

参加者は「実践リーダー教本」にそって、大本の発祥から霊界の実在、人生の目的、四大主義などを受講したほか、対話実習やスピーチの仕方などを通して、み教えの伝え方について学んだ。

受講者からは「講話の組み立て方や話し方など、得るものが多かった」「レジュメ作成やスピーチの実習は実践的で役にたった」「対話実習の難しさを痛感した」などの感想が寄せられた。

21世紀・生きがい講座

第181回「21世紀・生きがい講座」は、3月21日午後7時から、港区新橋の航空会館で開催され、椎野恭三祭務課主幹が「王仁三郎と大本歌祭～平和を祈る敷島の道～」と題して講話した。参加者は28人（内、一般7人）。

講師は、八雲神歌の神話としての背景と、王仁三郎聖師の言霊学からの解釈を説明。「古来から続く敷島の道、また民衆の中に息づいてきた〝歌垣〟は、和歌に潜む言霊の功徳が信じられてきた証である」と述べた上で、教主さまの「歌祭のよき雛型（ひながた）が、今後、国境も人種も宗教も超え、平和と和合の祭典として世界大に開かれていくことは間違いないようです」とのご教示を紹介し、王仁三郎聖師が復興した〝大本歌祭〟の今日的意義を語った。

参加者からは「大本歌祭の未来につながる大きな意義を理解できました」（男性・信徒）、「大本と中東和平プロジェクトにかかわる話が大変印象に残りました」（女性・一般）等の声が寄せられた。

東光苑祭典・行事予定

4月

1日（日）午前9時30分
新入信徒研修会（春の集い）

8日（日）午前10時30分執行
大本東京本部開設50周年記年・東光苑春季大祭
東光苑愛善歌奉納大会

18日（水）午後7時～8時30分
21世紀生きがい講座（航空会館・新橋）
講題　人生を豊かに生きるヒント～大本の四大綱領とは～
講師　柿崎哲男（愛善宣教課主任）

22日（日）午前10時30分執行
第36回　企業安全繁栄祈願祭

29日（祝・日）午前10時30分執行
四代教主毎年祭（17年）

5月

4日（祝・金）午前10時30分執行
教主生誕祭・三代教主（116年）教主補（121年）聖誕祭

5日（祝・土）午前10時30分執行
開教126年・みろく下生90年みろく大祭遥拝祭

13日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭

16日（水）午後7時～8時30分
21世紀生きがい講座（航空会館・新橋）
講題　合気道は世界の架け橋～王仁三郎と植芝盛平～
講師　七良浴大吉（京都府合気道連盟副会長）

28日（土）午後1時30分～
東光苑芸術祭